



福田恒存

江苏工业学院图书馆  
藏书章

第二卷

福田恆存全集 第二卷

昭和六十二年三月三十日第一刷發行

定價五千五百圓

著者 福田 恆存

發行者 西 永 達 夫

發行所 株式 文藝春秋

會社 東京都千代田區紀尾井町三ノ二十三

郵便番號一〇二一 電話東京(〇三)三三三一三三(大代表)

印刷所 精 興 社

製本所 加 藤 製 本 社

製函所 加 藤 製 函 社

©TSUNEARI FUKUDA 1987

萬一、落丁、亂丁の場合はお取替いたします

ISBN 4-16-363360-x

Printed in Japan

# 目次

I

シ エ イ ク ス ビ ア	
ロ レ ン ス	I
ロ レ ン ス	II
ロ レ ン ス	III
サ ル ト ル	
ジ ヨ イ ス	
チ エ ー ホ フ	
ガ ー ネ ッ ト	
エ リ オ ッ ト	
ヘ ミ ン グ ウ エ イ	

219	199	187	160	152	116	46	42	30	11
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----

## II

文學に固執する心	233
批評の非運	241
文學の效用	251
作品のリアリティについて	266
謎の喪失	280
急進的文學論の位置づけ	292
藝術の轉落	302
職業としての批評家	312
イギリス文學の可能性	327
批評精神について	339
文學史觀の是正	348

歌よみに與へたき書

知識階級の敗退

風俗小説について

理解といふこと

告白といふこと

自己劇化と告白

ことばの二重性

### III

近代の宿命

理想人間像について

肉體の自律性

478 469 431

421 409 403 394 381 366 359

利休にことよせて

論理の暴力について

白く塗りたる墓

民族の自覺について

観念的な、あまりに観念的な

二つの世界のアイロニー

文學者の文學的責任

教壇を奪はれた教師

日本人の思想的態度

#### IV

藝術とはなにか

583

567

560

547

534

522

516

501

489

483



覺書  
二

福田恆存全集 第二卷

裝釘  
柴永文夫

題簽  
田中眞洲

I



## シェイクスピア

ブラッドレー教授よ。あなたがイギリスにおけるもつとも偉大なる批評家であることに、ぼくはいささかも疑ひをさしはさむものではない。あなたはたんにイギリスや大陸のシェイクスピア學者のあひだに最高の信望を有してゐるばかりでなく、この日本においても専門家から最大の敬意をばらはれてゐる。名著「シェイクスピアの悲劇」はすでに八年まへ、「生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめる」ことを目的とするわが岩波文庫のうちにをさめられて、あまねく讀書子の眼にふれてゐるが、その解説に曰く——「ブラッドレーと同意見である限り、批評家として圓熟の域に達したものであり、さうでない場合は、なほ習練が不足してゐると言つてよいのである。しかも、習練を積んだ暁には、彼の見解に到著することが豫想され、彼と同意見であるといふ證據が得られた時、批評家は自己の判断に確

信と安心とを與へるのである。」

いはばあなたは批評家の——すくなくともシェイクスピアを論ずるものの試金石であるわけだが、ぼくはそのテストにみごとに落第する。といふのは「シェイクスピアの悲劇」がおもしろくないといふ意味でもなければ、それに反對意見をもつてゐるといふわけでもない。ただ不滿なのだ——文字どほり一種の生理的不滿を感ずるのである。刺戟され、興奮させられ、しかもカタルシスを與へられないからである。このやうな焦燥感は大なる批評家からも、また低級な批評家からも與へられはしない。あなたのシェイクスピア觀のうちにはすべてが胚種として含まれてゐるにもかかはらず、あなたはそれらのいづれの要素にたいしてもじつに公平なのだ。ことにどれをえこひいきして強調しようともしない。あなたはすぐれた學者として、なによりもあやまたざらんことを願つてゐる。シェイクスピアの作品

のうちにたしかに存在するもの、それに關するかぎり、あなたの眼は一點のしみを見おとさない。そのかはり、そこにはつきり在ると確證のつかぬものについてはまことに冷淡であり、無關心である。いひかへれば、あなたはシェイクスピアが意圖した効果をそれ以上でも以下でもなく、あやまたず受容する。が、その種があなた自身の心のうちに落ち、ふとした氣まぐれでああなたの肉體を養分として勝手に育ちはじめたら——いや、そのやうなことはけつしてありえぬ。あなたは用心ぶかくその芽をつみこみ、それが他の胚種の養分を奪ふことをかく禁じてしまふ。そのためにもぼくは興奮を感じながら最後の満足に到達しえぬのだ。しかもあなたを否定することもできず、新しくあなたに附けくはへることもできない。なぜなら、あらゆる胚種はすでにあなたによつて發見されてゐるからである。これはなんとも變妙な氣もちだ。

ぼくはいまそのやうなサスペンスをあへてかへりみず、あなたのマクベス論をよそに見て、ひとりがつてな感想を述べてみようとするのである。ぼくのねらひはシェイクスピアの想像力の祕密をうかがはうとすることにあるのではない——その點になればだれもあなたにおよぶものはあるまい——ぼくはただ「マクベス」がぼくの精神のどの部分に衝撃を與へたかを、そしてそのあとではもはやシェイクスピアの「マクベス」は存在せず、ぼくのマクベスしか存

在しなくなつてしまつたいきさつを語りたいとおもふだけである。もちろんそれはぼくの隨意で、なにもあなたにあつてつける必要もないわけだが、すでにいづたやうに、あなたはシェイクスピア劇の興へるすべての効果にバテントをとつてしまつてゐるので、ぼくとしても論中ある地點まではことごとくあなたのマクベス論にこだはらずにはゐられさうもないのである。迷惑であらうが、權威者の義務として許されたい。

## 一

まづあなたが「ハムレット」と「マクベス」との共通性に注目してゐることには、ぼくも同感である。「兩者いづれの主人公も、思想から進んで危機的な決斷や行動に到達することは困難であり、」いづれにおいても、『オセロー』や『リア王』の場合のやうに、痛ましい哀傷が主要効果の一つとはなつてゐない。」また「悪は『マクベス』において巨大な活動力を示してゐるが、それは、イアーゴやゴネリルの冷酷無神経な非人道ではない。」のみならず「此處では最早、それに先立つ二悲劇（『オセロー』）におけるやうに、その筋を純粹の人間行爲に局限してゐない。前兆が再び（「ハムレット」のば）天地に満ち、幽霊が墓場から現はれ、この世のものでない光が、破滅する人の頭の周りに明滅す

る。」まつたく同感である。いつてしまへばそれまでのことだが、けだし四大悲劇についてこれだけの概括的な比較をこころみるのはかならずしも凡庸批評家のなしうるところではない。にもかかはらず——ブラッドレー教授よ——あなたはこれほどだしく出發點を選びながら、なにゆゑ「マクベス」を「崇高」なる悲劇などといはれるのか。「イアーゴー」を心ならずも眺める讀者」が「マクベス」夫人に畏怖を感じるなどといかなる理由で斷ぜられたのか。あるいはあなたは「讀者」ではなく「觀衆」を頭においてゐたのかもしれぬ。

が、遺憾ながらぼくは「マクベス」をたとへ舞臺においても成功しうる脚本とは考へない。もつともそれがすでにシェイクスピア生前において人氣を博し、その後も大向を喝采せしめてきた事實をみとめぬわけではない。しかしその人氣はプロットの大がかりな芝居げと超自然的要素のペイザント式演出とによつたものにさうゐなく、それを劇としての、あるいは文學としての本質的效果とはなしたがたい。エリオットは「ハムレット」をシェイクスピアの失敗作と斷じたが、「マクベス」においてこそシェイクスピアはあきらかに失敗してゐる——それがたしかに純然たるかれの作品であるとするならば。トマス・ミッドルトンが合作したかどうか、その一部がかれの作品から剽竊せられたかあるいはのちに挿入せられたか、それはぼくの知るところではない。

るではない。ぼくはただ正直にこれを實在せる大詩人シェイクスピアの四大悲劇の一として——それもそのうちの最後の作品として考へるほかに手はないのである。

さて、ブラッドレー教授よ。「マクベス」がなにゆゑ崇高であるか、その主人公はどの點で壯大であるのか。その點だけは、ぼくもあなたの鑑賞眼を疑はざるをえない。ぼくはともすればマクベスもマクベス夫人も輕蔑し去りたい誘惑を禁じえないのだ。崇高などとはとんでもないこと——じつに卑小陋劣、とるにたらぬ小人物である。小人物の没落は崇高なる悲劇になりようはずもない。それをあなたは見——が、この點においてもあなたの感受性はたしかに見るべきものを見てとつてゐる。「ハムレット」と異つて、この作品の用語が「特異な壓縮、含蓄、氣力」をもつてゐることをあなたは看破してゐる。いや、看破してゐるといふべきではあるまい——さういふ讚辭を通じてあるひとつの事實を豫感してゐるといふべきであらうか。ぼくは「壓縮、含蓄、氣力」といふことには、にはかに同意しかねるが、すぐそのあとにつづけて「否、暴力さへもが認められる」といふことはには賛成だ。あなたの公平な學者氣質は、この「暴力」の一事をもつて「壓縮、含蓄、氣力」を無視しえなかつたにさうゐない。が、下根のぼくは少々の美德を犠牲にしても「暴力」の存在に騒ぎたいのである。たしかに「暴力」である。「マクベス」の用語は簡潔を



とほりこして、じつに難解なまでに刈りこまれ、抽象化されてゐる。てにをはとして前置詞は節約され、動詞もジュランドやパーティシブルに變形せられてゐる。これはたんなる用語の問題ではない。文體そのものの抽象化が必然的に品詞の構成を變へるのである。そのためには抽象名詞が擬人化され、主格の位置につけられる。が、これははたして「マクベス」劇の長所であらうか。措辭は「巨大で峻嚴な偉觀」を呈してゐるとのみいつてすまじえようか。あなたもそれらが「とところどころ誇張に墮してゐる」ことをみとめてゐる。しかし、「ところどころ」どころか、その「巨大」さが人物の性格と適合してゐる箇處を、ぼくはほとんど見いだすことができなかった。それはまさに事大主義である——マクベスのつひにのがれられなかつた、そしてそれによつて「マクベス劇」の展開せられた基調ともいふべき、一種の事大主義にほかならない。

ついであなたは「マクベス」が他の三悲劇にくらべてはるかに短く、しかもその受ける印象は短さといふよりは「速さの印象」であることを指摘してゐる、といつて「それは悲劇中で最も猛烈な、最も集中された、又多分最も物凄いと云ひ得る作品であらう」といふのはどうであらうか。「速さの印象」といふ點で、じつはぼくもまつたく同感である。しかし、それは「マクベス」の長所ではなく、あきらかに他の三悲劇にくらべて劣つてゐると考へなくてはな

らぬ點であるやうにおもはれる。ここでは觀念が想像を起え、性格を組み伏せ、シェイクスピア得意の雰圍氣の造型をすらゆがめてゐる。よくマクベスの心理やマクベス夫人の性格などが稱揚されてゐる——が、この作品を注意ぶかく讀んでみるがよい。性格だの心理だのといふものはなにもありはしない。すべては觀念のために仕組まれ、主人公も、ダンカンもバンクォーも、あらゆる登場人物はイデオットに仕立てられてゐるではないか。で、ぼくはこの作品からシェイクスピアの名を追放したい誘惑にも驅られるのだ。ぼくたちの親しんできたシェイクスピアは——「夏の夜の夢」「お氣に召すまま」「テムベスト」「ヘンリー四世」「リチャード三世」「リア王」「オセロー」の作者は、いつたいどこへいつてしまつたのか。「ハムレット」のシェイクスピアにしたつて、これほど性急で、干からびてはゐなかつた。これほど自意識はつよくなかつた。これほど遊びを忘れてはゐなかつた。が、それはどうでもよいことだ。

しかし、さういふ「マクベス」においてすら、シェイクスピアの天才はときをり意識の間隙をねらつて、その想像力を湧出させる。ぼくは「マクベス」を一貫した劇的造型力の持續としてではなく、主題から離れた想像力の詩的なたはむれとしてそのいくつかの斷片を楽しんできた。それらの箇所はもはや「マクベス」の主題展開となんの關係も